

talk! talk! talk! シンガーソングライター・植村花菜さん



シンガーソングライター 植村花菜さん

シンガーソングライターとして活躍をされている植村さんは、昨年念願の一眼カメラデビュー。海や空などさまざまな光景を独自のセンスで切り取り、写真に収める。本格的なカメラでの撮影ははじめてばかりだというが、作品の完成度は高く、プロのフォトグラファーにも絶賛されるほど。思い出が色あせずに残ると言う写真の魅力や、本格的な撮影をはじめたことで感じた創作活動への影響などをうかがいました。

プロフィール

うえむら・かな 1983年1月4日生まれ。兵庫県出身。シンガーソングライター。大阪でストリートライブをおこなっていた際に声をかけられた「ストリートミュージシャンオーディション」に参加し、1200組の中からグランプリを受賞。2005年に「大切な人」でメジャーデビューを果たし、透明感のある独特の歌声で老若男女から人気を集める。2010年リリースのミニアルバム「わたしのかけらたち」に収録された「トイレの神様」が発表されるやいなや、大反響を呼び、オリコンや着うたランキングの上位を占める。さらに曲をモチーフにした小説やドラマ、絵本なども作られ、社会現象となった。同年7月には上海万博にてパフォーマンスを成功させ、さらに注目を集めた。ツアーやライブ、イベントなど精力的な活動を続ける。「わたしのかけらたち」以来1年10か月ぶりとなる待望のニューアルバム「手と手」が2012年1月25日に発売。

Beginning 出会い

これまでどんなカメラをお使いになってきましたか？

以前はコンパクトデジタルカメラを持っていたのですが、記録用といった使い方で、構図を意識したり光の差し込みを気にすることはありませんでした。ほかに魚眼カメラやトイカメラを持って遊んでいたのですが、カメラはいつも身近にある存在でした。魚眼カメラはフィルムだったので、現像するまでどんなものができるかわからないというドキドキ感が気に入っていましたね。トイカメラはそれ自身が可愛かったので、持ち歩くだけで楽しいんです。お遊びでいるいる撮るのはすごく楽しいのですが、カメラというものが好きなので、漠然と「いつか本格的に一眼カメラを持ちたいな」と思っていました。ただきっかけがなく、二の足を踏んでいたんです。

そんな植村さんが、一眼カメラを使いはじめたのは何がきっかけだったのでしょうか？

1年くらい前にカメラに詳しい人と話すことがあって、そのときふと「前から本格的にカメラはじめてみたかったんだよ」といったら「じゃあ、今から買いに行こう!」とおっしゃるので、その足で家電量販店へ行っていました(笑)。今まで買いたかった思いながらチャンスを逃してきたので、今度こそ熱が冷めないうちに買おうと勢い込んだんです。本格的なカメラを使うのははじめてだし、初心者向けのものを選んでもらって、ついに一眼カメラデビューを果たしたんです。使ってみたら楽しくて、すぐにのめり込んでしまいました。これまで躊躇していたのはもったいなかったですね。

一眼カメラデビューしてすぐの頃は、どんな写真を撮られましたか？

最初のうちはとにかくいつでも首から下げて、目につくものすべてが被写体でした。ツアーで地方に行くときも持って行って、しょっちゅうパシャパシャとシャッターを切っていました。例えば楽屋にあるミネラルウォーターのペットボトルをいかに格好よく写すか考えて、構図を変えたり、カメラの設定をいじったりと試行錯誤の連続でした。ツアーで地方に行くときも常に持って行って、いろいろな被写体に挑戦しました。

Pleasure 楽しみ

一眼カメラを使った撮影で、「最高の一枚」はどんな写真でしょう？

まだまだ未熟なのですが、プロのフォトグラファーの方に褒められた一枚があります。沖永良部島へ行ったとき、とにかく海が美しく、海や砂浜、空、島にカメラを向けっぱなしでした。そのときの一枚の写真が、フォトグラファーの方をはじめ、見せたみなさんから絶賛されたんです。夕陽と島が海に反射していて、自分で見てもきれいだっただけからシャッターを切ったのですけれど、写真自体がそこまで絶賛されるとは思っていなかったのがびっくりしました(笑)。

偶然に奇跡の一枚が撮れる、植村さんのセンスの高さに驚かされます。最近ではどんな被写体を撮影されていますか？

空を飛んでいる飛行機内の窓から、空の写真を狙うことが多いです。昔から飛行機に乗るときはいつも窓際をとって、長時間のフライトでもずっと外を見て過ごすくらい「空」が好きでした。一眼カメラを持ち始めてからは、機内では絶対カメラを構えています。ずっと空を見ていると、別の飛行機が彼方にすーっと飛んでいく瞬間が見られたりするので、シャッターチャンスがたくさん潜んでいるんですよ。以前、飛行機雲が空に伸びていく一瞬の光景を写真に収められたときは感動もでした。

飛行機の窓越しでの撮影はなかなか難しいと思いますが、コツはありますか？

窓の厚さで写真がぼやけてしまったり、レンズが反射して写りこんだり、実は今でもよく失敗しています。シャッターチャンス! と思って慌ててカメラを構えても、飛行機は動いていますから、逃すこともしばしばあって本当に難しい。でも難しいからこそ、根気よく何枚も何十枚も撮りつけて「最高の一枚」がカメラに収められた瞬間のよろこびが大きいのだと思います。創作活動も同じで、何度も失敗しながら、珠玉の一曲をつくります。私はきっと、産みの苦しみの先にある満足感が人一倍好きなのでしょうね(笑)。

本格的にカメラをはじめたことで、創作活動に影響はありましたか？

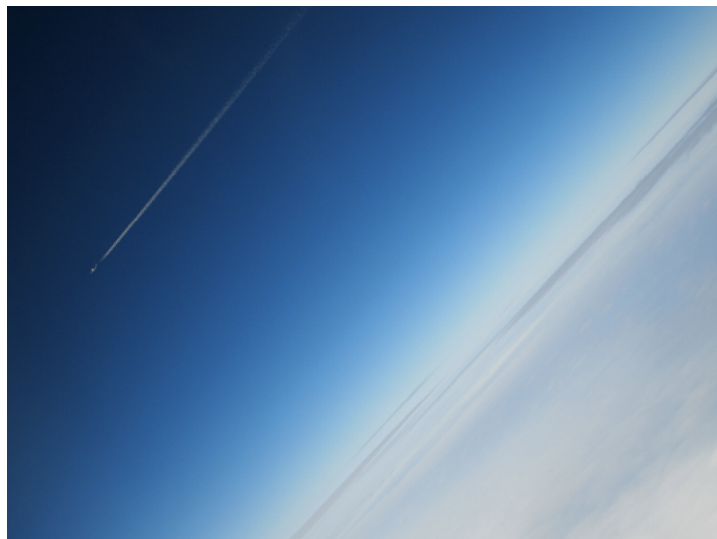
曲づくりには自分のすべてが反映されます。一眼カメラで写真を撮りはじめたことで生まれた、新しい感動や経験は必ず生かされています。被写体を見つける感性や、ファインダーを覗いて見える景色をどうふうに取り取るかといった感覚を学んだのは、曲をつくる上でいい影響になりました。



Photo's 作品紹介









Future これから

これからどんな写真を撮影されていきたいですか？

好奇心をもって、どんどん新しい被写体に挑戦していきたいです。毎日同じ生活の繰り返しだと、ファインダーを覗いたときの景色も同じようになってしまいがちなので、面白くなってしまいます。だから行ったことのない場所や、初めて出会うものに対して積極的になっていきたいですね。近いうちにギターとカメラを持って、アメリカで一人旅をしようと考えています。アメリカでは撮りたいものだらけでしょうから、今からワクワクしているんです。楽しく撮るのももちろんですが、カメラのスキルをもっと磨いて帰ってきたいと思っています。

どのような撮影ができるようになりたいですか？

もっとカメラを知って、色合いなどの細かい設定が自分でできるようになりたいです。性能を使いこなして、なおかつ自分らしさが出せたら理想的ですね。一眼カメラでの撮影をはじめから、カメラの機種によって全然特徴が違うこともわかってきたので、自分に合った新しい「相棒」探しをするのも楽しそうです。自分に合った愛機を使いこなせば、もっと新しいカメラライフになるのではないかと思います。まだ望遠レンズも使ったことがないし、やってみたいことばかりですね。

植村さんにとって、写真とはどんな存在でしょうか？

どんなに濃い思い出でも、記憶はいずれ薄くなってしまいます。でも写真があれば、たとえ記憶が薄れても、当時の気持ちを忘れてしまっても、一瞬でその瞬間に戻れるんです。色あせない思い出として、いつまでも残っていきますよね。そういうふうに思うのは、私は四人兄弟の末っ子で、子どもの頃の写真が少なかったのが悔しかったんです（笑）。だから自分はたくさんの写真を撮って、思い出を記憶しておきたいです。どんな写真も、そのときにしか撮れない「奇跡の一枚」なんです。とくに自然現象は自分ではつくり出せないし、撮り逃したら二度と見られないかもしれない。撮りたかった瞬間を逃して後悔をしたくないので、これからはさまざまなものにレンズを向けていきます。

植村さんの感性で撮られる、珠玉の一枚が楽しみです。ありがとうございました！



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン